

キクエおばあちゃんの年賀状

再び識字学級で

キクエおばあちゃん（仮名）と私が初めて出会ったのは、担任をしたタカちゃん（仮名）の家庭訪問に行った時でした。

おばあちゃんは、同和地区の出身で、タカちゃんの祖母にあたる方でした。

それから30年後、私は再び同じ学校に赴任し、※識字学級でおばあちゃんと再会しました。

おばあちゃんは部落差別による貧困のため、小学校の三年生までしか学校に通えていません。

この話を聞いた時、私は30年前、家庭訪問の度に、「先生、うちの孫をよろしくお願いします。」と言われたことを思い出しました。

そして、自分が学校に行けなかったからこそ、「孫は学校でしっかり学んでほしい」という思いが込められていたことに気づきました。

字が書けるようになりたか

識字学級でキクエおばあちゃんを訪問するようになって

二年めのことでした。

おばあちゃんが、独り言のように、「字が書けるようになりたかあ。」

と言われました。おばあちゃんの顔をのぞき込むと、「今まで言えんやっただけど、字が書けるようになりたかっでずっと思っとった。」

とおばあちゃんは続けました。私はハツとして、「一緒に字を練習しましょう。」

と、思わずおばあちゃんの手をにぎりました。

おばあちゃんは、ホツとしたような表情を浮かべ、病院で受付の人に名前を書いてもらっていたことや、提出書類をおじいちゃんに書いてもらったことなどを話してくれました。

キクエおばあちゃんの一言が・・・

帰りながら私の頭の中では、キクエおばあちゃんという言葉が何度も繰り返されていました。

その時、私は字が書けてあたり前と思っている自分に気づきました。

そんな私に、おばあちゃんが本当の気持ちを話せるはずがありません。

と言われます。

80歳を超えてもなお、前向きなおばあちゃんの姿は、今を懸命に生きる喜びを私に教えてくれています。

私は、識字学級でおばあちゃんと出会い、その生き方にふれることで、自分の価値観が変わってきたように感じます。

だからこそこれからも、自分の内面をいつも見つめ、自分に問いかけていきたいと思えます。

おばあちゃんの一言は、偏った価値観で物事を見ている自分の間違いを気づかせてくれました。

初めて書いた年賀状

次の識字学級から私たちは、年賀状を書くことを目標に文字の練習を始めました。

若い頃から力仕事をしてきたおばあちゃんは、節くね立った手で力の限り鉛筆をにぎりしめ、一画一画力をこめと書いていきます。

少しでも線がずれると消し、また書いては消しているおばあちゃんの姿は、部落差別によって奪われた文字を取り戻そうと、闘っているように見えました。

そして、年賀状が完成した時、「生まれて初めて年賀状を書いた。」

と、うれしそうに微笑んだおばあちゃんの顔は、今でも忘れられません。

今が一番幸せ

おばあちゃんは、私にいろいろな話をしてくれます。そして、いつも話の最後には笑顔で、「今が一番幸せ。」



※識字学級とは
部落差別によって学ぶ機会が奪われた「文字」を習得することから始まったのが識字学級です。
現在は、部落差別をなくすための学習が様々な形で行われています。